

藤原伊藤 (ジャーナリスト)

「先ほどお話ししました通り……」
 「安藤部長に聞いてるんです！」
 それでも有江課長だ。
 「葛西の原発に対する発言につきましては、個人的な見解でございます。当社といたしまして、原発、火力、発電方針にかかわらず、国として、安定的な電力を供給することを望んでいます。以上です」
 怒号が飛んだ。大型で強い台風26号が、関東地方に豪雨をもたらしていた。636席ある大ホールに、それでも集まった60人ほどの住民たちは、みんな必死だった。
 何を尋ねても満足な回答が返ってこない。「安全です」「ご安心を」「ガイドラインを下回っている」などといった言葉が繰り返されるだけ。終了予定時刻を15分ほど回ったところで、司会者が一方的に告げた。
 「大変恐縮でございますが、質疑応答をこれで終了させていただきます。本事業は、地域の皆さんのご理解を得ながら、丁寧に取り組んでまいります。引き続き、ご協力の方をよろしくお

願いたします。
 「どこが丁寧だよ。こんなのが丁寧なのかよ」
 「これもちまして、本日の説明会を終了させていただきます。ありがとうございます」
 「丁寧じゃねえだろ。勝手に止めんな、この野郎！」
 「退場につきましては、ご入場いただいた扉を開放いたします。会場からは、すみやかに退場していただきますよう、お願いいたします」
 暴動にはならなかった。人数が少なすぎたのか、参加者たちの間に諦めにも似た感覚が宿り始めているせいなのか。彼らは口々に呪詛の言葉を投げつけながら、けれども整然と、夜の雨の街に吐き出されていった。

涸れる水源

山梨県の最東部、神奈川県との県境に近い上野原市秋山。信仰の山として知られる二十六夜山の麓の、現在も踊り念仏の行事が伝承されている無生野地区で、「棚の入沢」と呼ばれた川

相模原伊藤エン

措置とか」
 「……どういう文献ですか。」
 「……個別の事業については、この場では控えさせていたいただきたいと思えます」
 きりが無いのもう止める。要するに国交省側は、具体的な問題について何も答えることができなかった。事業主体であるJR東海の沿線住民に対する態度についても、筆者自身がこの目で見ていた。
 昨年10月、JR南武線武蔵中原駅前の川崎総合福祉センター大ホール。環境影響評価準備書の発表直後にJR東海が各地で重ねた説明会行脚のひとつに参加してみると、そこにはリアに生活を脅かされかねない地域住民たちの苛立ちが渦巻いていた。
 「国費が投入されるとの報道がありました。JR東海の全額自己負担という話だったのに、事実なら国民に大変なツケが回されることになる。それから葛西(敬之)会長(当時。2014年4月から名誉会長)は(リニアとも絡めて)原発を推進していますね。それについても伺い

たい。
 ……おたくら、JR東海さんの社員の給料で造ったらしいじゃないですか。本社でテーマパークにしたらいかが。住民は不満だらけなので、白紙撤回をぜひ考えてもらいたい」
 応じたのは中央新幹線推進本部環境保全統括部の有江喜一郎課長である。ワシントン事務所副所長から転じてきたエリートだ。
 「国費の投入という話はございません。葛西の発言につきましても、個人の発言ですので、当社の意思と関係ございません」
 一人おいて指名された男性がぶちまけた。
 「リニアは葛西会長の旗振りで動いているんじゃないですか。それを個人的な発言で原発だつて、冗談じゃないですよ」
 「安藤部長、ちゃんと回答してください」
 安藤陽一・環境保全統括担当部長は、中央新幹線推進本部で建設部の担当部長も兼任している。この日の説明会に現れたJR東海の関係者の中で最も地位の高い人物だった。が、彼は答えをいっさい有江課長が再び、

123 宮前 山本

G2 vol.17 2014. SEP 読者誌MOOK